
見える君、見えない僕

凪沚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見える君、見えない僕

【Zコード】

N6765C

【作者名】

風汎

【あらすじ】

僕は人が大勢いるところでは息が出来ない。なるべく人が居ないところで過ごす。そんな日々の中見舞いで訪れた病院で君に出会う。

第1話・嫌いなプリン

僕は人が大勢いるところは嫌いだ。

どこに行つてもなるべく人の居ないところを捜す。

息が詰まるというか、息が出来ないというか、とにかく苦しくて苦しくて堪らなくなる。

友達が事故で入院したと聞いたので、お見舞いに行つたことがある。

病院の中に入つた瞬間に帰りたくなった。

でも、お見舞いは？嫌いなプリンまで持つてきたのに、自分に言い聞かせて奥に進んだ。

一階の受付や、薬を受け取る待ち合い室、喫煙室、いろいろなところで人が溢れ出す。

どこの廊下を歩いても多くの人と擦れ違い、だんだん気分が悪くなる。

三階の一一番奥にある六人部屋が友達の居る部屋だと聞いていた。しかし、残念なことに三階はあまりにも広く、あまりにも人が多いので近付くことが出来なかつた。

休みの日に来たのが失敗だつた。

そう思いながら来た道を引き返そようとすると、下の階からガヤガヤと人が上がつて来るのがわかつた。

逃げるよう四階、五階、六階、と上がつて行く。

「エレベーターが故障するなんて有り得ない」

「小児病棟のは動いてるのに、最悪」

など、声が聞こえてきた。

話からするとエレベーターが故障し、上に行く用事の人が階段に群がっているようだ。

大人の声から、赤ちゃんの泣き声まで様々だ。

子供の声が際立つた。

何人いるのだろう？すごい勢いで上がつて来るのがわかる。

「四階」

「五階」

「六階、到着ー」

と、子供達の笑い声が響いた。

後から大人の声で、静かにと一言。
僕はそれを七階で聞いていた。

人にまみれるのが怖くて、急いで七階に上がつた。七階は屋上だ
った。

エレベーターもなく、階段でしか来れないらしい。
廊下も狭く、部屋が一つもない。窓もなく暗い。
けれども外に出るドアが光り輝いていた。

一直線の廊下をそれに向かつて歩いた。

ドキドキしてる。何でだろう？階段を急いで上がつたからかな？
少し鎧び付いたドアを開けると、風が僕に向かつて吹き付けた。
決して優しくない風に打たれながらもドアを開いた。

今日も慣れた足取りで屋上に向かう。

エレベーターは三日経つた今でも機能していない。

聞いた話だと二階で止まっているエレベーターに、上から人が落ちたらしい。

確かに五階のエレベーターのドアを無理矢理こじ開け、そこから車椅子に乗つた男の人飛び込んだと言つ話らしい。

想像しただけで寒気がする。

その人が落ちてどうなつたか何て想像したくもない。

エレベーターが復旧しても誰も乗らないだろう。

他にもエレベーターはあるし、階段もある。

故障中と書かれた貼り紙を見てそう思った。

一階の受付や、薬を受け取る待ち合い室、喫煙室、今日も渋々通つて来た。

階段を上がる前になると、気分の悪さがピークに達する。いつも少し休憩してからゆっくり上がって行く。一段、また一段、ゆっくりゆっくり上がって行くと、気分が澄んでゆくのがわかる。そうしてまた上がって行ける。

一階、（省略）、六階、七階。

「急い」

暗い廊下を真っ直ぐ歩いて、一つしかないドアを開ける。君がいた。

今日は風がなく、青空がゆうゆうと続いていた。

毎回思つけど、色素の薄い髪の色。茶色や栗色で表現出来るけれど、何て言つか茶封筒のちょっと濃い色。

ドアの近くに腰を下ろすと、君は気付いて軽く手を上げた。

まだ足は治っていないみたいだ。松葉杖が転がっている。
「俺いつになつたら退院出来るのかな？」

片足でケンケンと地面蹴つてギブスの足を浮かせながら歩くと、僕の隣に座った。

第2話・君と過ごし

一つ年上の君は、高校一年で、進学校の言わば頭が良い人の部類に入る人間だ。

失礼だがそんな風には見えなかつた。
優しそうだし、面白いし、どちらかといふとスポーツの方が得意に見える。

ぼけーっと空を見上げながら考えていると、君が口を開いた。

「なあ？毎回思つてたけど、お前学校は？」
いきなり痛いところ付かれてしまつた。

「さすが進学校！！目の付け所が違うね」
「ボケ、真面目に答える」

そうだ。僕は学校に行つていない。

学校に行つたら苦しくなるから、息が出来なくなつてきっと死んでしまうから。

君は僕のことを良く知らない。僕も君のことを知らない。
当然だ。

まだ出会つて一週間も経つていない。

だから君は僕の不思議な病気を知らない。
人が多いところでは息が出来ない。

肉体的にも精神的にも弱いから起こる病気。

両親はそんなことを言つていた。

自分でも原因がわからない。

小学生のときは何も無かつた。

それは単に人が少なかつたからなのかも知れない。田舎で平和で普通で平凡で、何もかもがふわふわと過ぎていつた。

小学を卒業と同時に都会に引っ越した。

都會と言つても村が町になるような、町が市になるようなもので、
人口が急激に増えるだけのものだつた。

珍しいものは何もない。

全ての大きさが倍になつただけ、学校も駅も病院も大きくなつただけだつた。

僕は中学の入学式初日から氣分が悪かつた。

校門をぐぐり抜け、玄関に入る。

そこら辺で記憶が曖昧になる。

確かに同じ新入生に声をかけられた気がする。
顔色がそろほどに悪かつたのだろうか？大丈夫？と何度も心配そうに聞かれた気がする。

多分ふらふらになりながらも僕は初日から保健室に流れこんだような…。

あまりにも殺伐とした記憶に嫌気がした。

そんなこと説明しても仕方ない気がした。

君と居ると、全てがどうでもよくなる。良い意味で楽になる。何も考えずに何も口にすることもなく、ただ時間が過ぎていく。
それだけで幸せだつた。

「学校はサボりがちなだけだよ。心配しないで」

「そつか」

君は遠くを見ていた。

あまりにも淋しそうな目をしていたので、今にもフェンスを飛び越え、その先にある暗い世界に落ちて行つてしまいそうで怖かつた。風が強くなり、僕等は屋上を出た。

松葉杖をだるそうに扱いながら進む君を見ながら、ゆっくり歩いた。

階段を前にすると、

「邪魔だから持つて」と松葉杖を僕に託し、片足でトントンと降りしていく。

その姿が心配でならなかつた。

おぼつかない足取り、屋上に繋がる六階から七階の階段は手摺りがない。

屋上に行くことは歓迎されることではないらしい。

君の足元に田を配りながら同じ速度でゆっくり降りる。

途中の踊り場で少し休む。

「けつこう、しんどい」

笑いながらも、顔が赤くなっている。

片足で歩くのは、それほどに辛いことなのだろう。壁にもたれ掛かる君は、ふーっとため息を吐いた。

「行くかー」

それから体を起こし、ゆっくりではあるが降りていった。途中つまづき、転びそうになつたので手を貸してあげた。

「悪いな」と恥ずかしそうに咳く君の隣で、僕は君の存在に違和感を感じていた。

冷たいとかじゃない。

温度が無い。口ウソクのような、曖昧な感じだった。

階段を降り、六階に着くと

「ちょっと待つて」と、僕の手を離れ病室が並ぶ方に歩いて行つた。

階段に座り、君を待ちながら先程の違和感を考えた。

何だつたのだろう?

手には体温が無く、僕の温度が移るわけでもなく、君の温度が移るわけでもない。

そこに君はいない。

第3話・再確認

映像を見せられている。
悲しい。とても悲しい。

「お待たせ」

声に考えは消えた。

君はどこから借りて来たのか、車椅子に乗っていた。

「これなら移動も楽だらう?」

「確かに、でもエレベーター動いてないよ?」

素朴な疑問をぶつけると、君は勝ち誇ったような顔で言った。

「秘密の道があるのさ」

ニヤリと笑った顔が君らしくて、ついにコツチまでにやけてしまつた。

「とにかく、向こうまで行くぞ」

君が指示した方向に僕は青ざめた。

その方向は先程、君が車椅子を借りに行つた方向で、病室が並ぶところだ。

君は僕の病気を知らない。ましてや君は僕が病気だなんて思つてもいない。

「大丈夫か? 真っ青だぞ? 少し休むか?」

学校? 違うここは病院。

同じことを学校で言われたような、頭が回らない。

まだ人に囲まれてもいないので、どうしよう? 落ち着け、落ち着け、どうにかなる、何とかなる。

「大丈夫だよ。向こうまで行つてそれからどうするの?」

一番奥まで行くと、非常口になつてるんだ。そこは車椅子でも行けるよう、緩い坂道になつてるんだ

心配そうな顔で覗き込みながら話す君。

悪いことをしているわけではないけれど、罪悪感が生まれる。

言つてないからかな？

「じゃあ、早く行こう」

壁に立て掛けた松葉杖を車椅子に座る君に渡し、車椅子を押し出す。

特に大きな音を立てるわけでもなく車椅子は動き出した。思つていたよりは軽く、楽に進み出した。

座つている君が何かを話しているが、聞き取れない。耳から耳に空しく通り過ぎるのが自分でも分かる。

聞こえるのは、自分の荒くなつた呼吸だけだつた。

ナースステーションを通り過ぎ、左右に広がる病室をも通り過ぎて行く。

閉じられた扉や開いた扉。そこから人が見えたり見えなかつたり。人が廊下に出てくる気配は無い。

何人かと擦れ違つが、異常をきたすほどではない。

看護婦さん、お見舞いに来たお母さん、たまたまトイレから出て来たおじいちゃん。

異常をきたすほどではない。

集団で擦れ違つたわけでもない。

それでも緊張は解けない。

いつどこから現れるかもしれない人達に怯えていた。

所詮、緊張していたところはどうしようもないのだけれど。

君を見た。

先程の元気はどこへやら、顔が青ざめていた。

声をかけることが出来なかつた。

自分のことで手一杯。自分のことに使つていい手を、他のことこ
使う勇気が無かつた。

今の状態では、自分がなによりも大事だ。

廊下を進む。

今のところ問題らしい問題は起きていない。

先に進み、早く非常口から外に出たかつた。

後少し進めば届く、そんな位置まで来ていた。

自然と足が早くなる。車椅子を押す手に力が入る。

やつとここから出られる。

そう思っていた矢先。

視界に一人の少年が勢いよく飛び込んで來た。

目の前に突然やつてきた少年は小学生くらいの小さい子だった。

進路を塞がれ、僕等は止まってしまった。

焦る気持ちと不安で叫びそうになる。

どいて、早くそこをどいてよー!

少年は僕等に気付く様子も無く、病室にいる誰かと話しているようだつた。

病室から少年と同じ小学生くらいの子が顔を覗かせた。

嫌な予感がした。

このまま少年の横を通り過ぎて外に行きかつた。

でも病室からは次から次に、子供が溢れ出していた。

寒い。

助けて。

誰か、息が出来ない。

子供達も見れない。

君も見れない。

何も見えない。

霞んでいく、白い、ぼやける。何も見えない。

気持ち悪い、吐きそう、頭が痛い。痛い。

痛いよ。

気付けば外に出ていた。

非常口に無惨に飛び散っている嘔吐の痕。

緩い坂にだらしなく、汚く醜い川を作っていた。

これが僕の病気なんだ。

惨めで、可哀相、弱いからなにもかもが弱いからなる病気。本当

情けない。

はこでしまことりだよ。

第4話・幽靈と緩い坂

非常口に座り込み、涙を流すことしか出来なかつた。見上げた空は、虚しい灰色をしていた。

風が強く、今にも雨が降り出しそうだ。

カラスの鳴き声が響いた。確實に僕を馬鹿にしている声。あれ？ いつの間に耳は聞こえるように？

見上げていた視線を戻すと、何かが無いことに気付いた。

君？

そういうえば君はどうしたのだろう？

立ち上がり、非常口に耳を当てる。何も聞こえない。

恐る恐る非常口のドアを開けた。

子供達は居なくなつていた。

廊下には車椅子と松葉杖だけがポツリと置かれていた。

君はどこに行つてしまつたのだろう？

今日もいつものように屋上に向かつた。

一階の受付、薬を受け取る待ち合い室、喫煙室、やはり人が溢れており、逃げるようになに階段に急ぐ。

エレベーターの前を通りると故障中と書かれた貼り紙が消えていた。緑色のドアは開くことはなく、降りる人もいない。乗る人もいない。

い。

僕は無視して先に進んだ。二階、（省略）、六階、七階。

階段を上る。

いつも以上に急いで、休むことなく進み続けた。

暗い真っ直ぐな廊下。

ドアが一つだけ…、開く。

眩しい光りが差し込んだ。

やはりそこに君は居た。

「おはよう」「

流れる茶色い髪。

中途半端な笑顔。優しい、泣きだしそうな笑顔。

昨日夜に降り出した雨が、そこらに小さな水溜まりを作っていた。
今は止み、昇りきつていかない太陽が新鮮だった。

「聞きたいことがある」

「何?」

「君は、人間じゃない。」

呆気に取られた顔でこっちを見ている。

「君は人間じゃない」

優しい顔に戻り、続けてと咳いた。

「昨日手を繋いだときからおかしいとは思つてたんだ」

君は空を眺めている。

「手を繋いだとき体温を感じなかつた。それに骨折で入院。僕の気分が悪くなり非常口を出て、すぐに中を覗いたのに君は消えていた。
しかも、車椅子と松葉杖を残して…、おかしいよね?」

君はまだまだ空を見上げている。

「何で消えたのかは解らないけど、君はもしかしたら幽霊じゃないの?」

笑った気がした。

微かにふつと笑みを浮かべたように見えた。

「そうだよ。俺はもう死んでいるんだ」

君は振り向き言葉を続けた。

「お前が来る少し前に、車椅子に乗つたままエレベーターに飛び込む事件があつただろ?あれは俺だつたんだよ。俺はあれで死んだんだ」

ウソツキ。

「さようなら」

君はそう言つと、幽霊らしく全てが薄くなり、そのまま消えて
いった。

君の目には涙が浮かんでいた。

本当に進学校出身？馬鹿だなあ。

屋上に取り残された僕は、特に急ぐわけでもなく屋上のドアを開けた。

廊下を進み、階段を下りる、六階に着くと非常口までの廊下をまた歩き出す。

午前中はやはり人が少ない。人は居るけれど、溢れるほどは居ない。

小学生達も今は学校だろうし、お見舞いに来る人はお昼から夕方が一番多いようだ。

何事もなく非常口まで到着した。

そこからまたドアを開き、緩い坂を下つて行く。
誰かが片付けてくれたのだろうか？

雨で流れたのだろうか？

嘔吐の痕はキレイさっぱり何も残っていなかつた。

汚い坂をゆっくり下る。
坂を下りながら、君を思つた。

君は人間だよ。

君は死んでもいい。

今会つた

「君」は曖昧だけど、これから会つ

「君」は消えたり出来ないはず。

同じだよ。

君と僕は、きっと…。

第5話・君とドアと僕

君は人間じゃないという言い方は悪かっただろうか？正しい言葉が見つからなかつたんだ。

ごめんね。

坂が終わりを継げていた。坂は病院の裏側に辿り着き、君に辿り着く。

病院の裏には隔離されたように一階建ての小さな病棟があつた。僕は知つてゐる。

僕も一時期ここに居たことがあるから。

病院から続く道を歩く。中庭の端にその病棟はあつた。僕はドアを開けて中に入った。

受付の人は誰も居なかつた。

一階にあがる階段を上り、一つの部屋をノックした。コンコン。

中指の骨で叩くとそのままの音が響いた。

「誰？」

中から声がした。

「僕だよ」

少しの無言。かすれた声が返ってきた。

「よく分かつたな」

この部屋は君が入院している部屋だった。

「ちょっと待つてろ。そっちに行くから」

ドアに背を預けて座ると、君も同じように座つたのだろうか？ドアが軽く揺れた。

「悪いな。病気がひどくてまだ会えないんだわ

ドア越しに君の声が響く。

「分かつてる。大丈夫だよ」

少しの沈黙。鳥の声。太陽の光。音すらしない病室。

「いつから気付いてた？」

君は今何を見て話ているのだろう？

「手を握ったときは変だな？ぐらいだったけれど、車椅子を押しているときの青い顔を見て、そしたら消えたから…、君はあの坂を下つてどこに行こうとしたのかな？つて考えて…」

自分の手？窓の外？床の木目？僕は同じもの見れているかな？「幽体離脱だけ？幽体離脱して僕と出会って、ここに連れて来ようとしたんだね」

天井を見上げると、君の髪に近い色をしていた。

「僕等同じ病気だったんだね」

ドア越しに君が泣いているのが分かった。

君はもう外には出て来ないだろう。

遊びに行つても君は部屋から出てくることは無かつた。

病気を思いだすのが嫌なのだろう。

僕も病気は決して良くなつたとは言えない。むしろ、悪くなつているぐらいだ。

でも、僕はまだ外に出ることが出来る。

君は出来ない。

君と出会つて一年ほど経とつとしていた。

ドア越しに話をするのは変わつていない。

ふと天井を見上げる。

確かに君の髪の色に似ているんだつたつけ？もう思い出せない。

僕は本当の君見えないまま過ごし続けていた。

言えない。

出て来て何て言えない。

それは

「死んで下さい」と言つてこむようなものだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6765c/>

見える君、見えない僕

2010年10月8日15時52分発行